

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520149

研究課題名（和文） 王朝物語の絵と和歌の関連についての研究

研究課題名（英文） Research on the Relationship between Pictorial Representations of and Waka Poems in Heian Narrative Literature

研究代表者

高橋 亨（TAKAHASHI TORU）

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10093048

研究成果の概要（和文）：王朝物語の絵は、作中和歌を主とした場面が多く、和歌を中心に享受されていた。そこには、和歌や連歌の創作と結合した注釈書との関連が強くみられる。『源氏物語』の貴族による詞書を伴った色紙絵には武家における源氏神話が強く反映しているが、女性による私的享受や大衆化というべき現象もある。見立てやパロディによる王朝文化の享受は、江戸期における新たな文化を生み出す母胎となった。海外を含めて王朝物語の絵画資料を新たに発掘したことも基礎的な成果である。

研究成果の概要（英文）：Among pictorial representations of Heian Narrative Literature, scenes in which waka poems are central are frequently portrayed and the Japanese style poems seem to have been particularly appreciated. It is well recognized that because the sections commented on extensively in regards to the creation of waka and renga, these sections were easily transformed into pictures. Due to the fact that the main character of *Genji monogatari* is a Minamoto, the same name as the ruling Shogun's family, pictures of *Genji monogatari* with head notes written by the nobility were commissioned. However, from the Edo period, *Genji monogatari* was read by women for pleasure and read widely by the population. Appreciation for allusion and parody of Imperial culture created a new culture in the Edo period. Including newly discovered data from foreign resources regarding pictorial representations of Heian Narrative literature has yielded fundamental results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：物語絵、和歌、源氏物語、狭衣物語

1. 研究開始当初の背景

(1) 『伊勢物語』や『源氏物語』などの王朝物語の絵画資料については、近年に海外の所蔵資料を含めた多くの新資料が紹介され、室町期や江戸期の作品も注目されるようになった。本研究においては、そうした最新の研究成果をふまえて、物語絵についての巨視的な視野のもとで具体的な資料に基づいた検討を始めた。

(2) 『狭衣物語』の絵画資料としては、これまで奈良絵本『狭衣草子』の他の『狭衣物語』自体の絵画資料はほとんど知られておらず、これを発掘し紹介しつつ検討する必要がある。

(3) 王朝物語絵の和歌との関連については、これまでの研究で和歌を中心とした場面の多いことは知られていたが、その場面における和歌の意味づけの検討を個別の作品に即して検討することとした。

2. 研究の目的

(1) 『源氏物語』を中心とする王朝物語の和歌と絵画資料との関連について、中世から近世にかけての注釈書や享受の実態に即した系譜学として位置づける。

(2) そのための基礎作業として、王朝物語に関する絵画資料をデータベースとして収集し、新資料を発掘する。

(3) 『源氏物語』の絵画資料については、武家による源氏神話との関連が指摘されてきたが、他方に女性を中心とした私的な享受もある。個別の作例に基づいたそれらの差異について、和歌との関連を中心にして王朝物語絵の総体を視野に入れて考察する。

3. 研究の方法

(1) 王朝物語絵の和歌と関連する現存作品を中心にして、これまでの研究史に基づいた通時的なデータベースを作成し、これに新出資料を組み込んでいく。

(2) すでに刊行されているカラー図版の図書、入手可能な画像資料を収集し、研究代表者自身により調査発掘した画像資料を加えて分析と考察を加える。

(3) 個別の王朝物語絵画資料について、その絵師や詞書筆者から、成立年代を推定するとともに、注文主や享受者などの歴史社会的な成立背景を考察し、和歌を背景とした文化コンテクストを探る。

4. 研究成果

(1) 『狭衣物語』の絵画資料について、その文献資料情報を整理し、現存絵画資料の情報一覧と併せて、データベースを作成した。そこには、これまで未紹介の作品を含んでいる。そのうち特に重要な、1「狭衣物語白描絵」（個人蔵・架蔵）、2「狭衣物語絵貼交屏風」（プラハ国立美術館蔵）、3「狭衣物語絵入写本」（ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション蔵）、4「狭衣物語白描絵入写本」（宮内庁書陵部閑院宮旧蔵本）について、資料収集し情報を整理した。

(2) 『狭衣物語』の絵画についての現存場面一覧表を作成した。承応三年刊絵入版本の挿絵48図を基準とし、場面番号と場面分けは流布本系による新潮日本古典集成『狭衣物語』（上・下、新潮社）に拠った。これに、(1)で示したスペンサー本に所載の86図、閑院宮旧蔵本の40図、プラハ本の36図、白描架蔵本の12図、白描個人蔵本の36図の絵について、それぞれの場面を同定して示した。なお、プラハ本は六曲一双の貼交屏風のうちの一隻が焼失したことが判明しているため、本来は72図を有していた。また、二種の「狭衣物語白描絵」は、本来は同一作品の別れであることが判明したため、現存するのが48図ということになる。

各絵画資料については場面順の通し番号を付してある。中には、場面を確定しがたいものも残るが、絵画化されている場面についての共通の傾向を探ることが可能となった。承応三年の絵入版本を基準とみてよいのであるが、もともと絵の多いスペンサー本にも絵入版本にある場面の絵が無いものが22図もある。また、閑院宮旧蔵本の半数を上回る26図が絵入版本には無く、スペンサー本や閑院宮旧蔵本の絵は独自性を強く示している。今後は、この現存場面一覧表を基準として、新たな資料を追加していくことが必要である。この表に対応させた画像資料の一覧も仮に作成してはいるが、画像の使用許可の問題があり、現状ではこれを公開することはできない。

(3) フランクフルト実用工芸博物館蔵の「物語百番歌合」とされてきた詞書5葉と絵13葉について調査し、これが『源氏狭衣歌

合絵巻』と称すべき作品であることを解明した。その絵巻としての復元によれば、「春」「夏」「秋」「冬」「祝」の順で、その詞書を伴った歌を「源氏」と「狭衣」を組み合わせで記し、その後源氏絵と狭衣絵とが貼り継がれていた。「物語百番歌合」の享受の過程でこうした絵巻が作成されたことは、分類や歌の組み合わせが大きく異なりながらも、その本文において強い共通性をもつことからわかる。この絵巻の復元においては、3葉の絵が位置づけ不明のものとして残されており、これが完結した『源氏狭衣歌合絵巻』に追加して屏風に貼られたものなのか、あるいは、より大きな作品の一部分なのかという問題が残されている。

(4) 近世初期の「源氏絵」とその伝称詞書筆者について、現存する8本について検討し、「源氏絵詞書伝称筆者一覧」の表をその没年順に作成した。その8本は、A) 京都国立博物館本、土佐光吉・長次郎画帖、B) 和泉市久保惣記念美術館本、土佐光吉画手鑑、C) 架蔵本、伝土佐光則画断簡手鑑、D) 徳川美術館本、土佐光則画帖、E) 大英図書館本、住吉如慶画帖、F) 架蔵本、絵・詞帖交屏風、G) 茶道文化研究所本、住吉具慶画帖、H) 根津美術館本、画帖である。

A) からD) までの詞書筆者たちの重なりにおいて、特に注目されるのは、八条宮智仁、四辻季継、阿野実顕、青蓮院尊純、中院通村、西園寺実晴である。これにより、絵と詞書が各5葉の断簡ながら、C) 架蔵伝光則本が、D) 徳川美術館本より古く、A) 京博本、B) 久保惣本との重なりが強いことが判明した。また、中院通村は室町期までの『源氏物語』諸注釈を集成した『岷江入楚』の作者中院通勝の子であり、後水尾天皇に近侍して、和歌や『源氏物語』の王朝文化を支え、三条西実条とともに、武家伝奏として徳川幕府との仲介者であった。三条西家の歌学や源氏学を継承し、徳川家康に『源氏物語』の講義もしている。

D) からH) までの伝称詞書筆者の中で特に注目されるのは、すべてに名を連ねる飛鳥井雅章である。この時代の能筆であり、中院通村とともに「源氏絵」画帖詞書のコーディネーターとしての役割を推測させる。大炊御門経孝は大英博物館蔵「源氏物語白描画帖」の全詞書筆者とも伝称され、また、園基福はサントリー美術館本の住吉如慶画『源氏物語画帖』の伝称筆者である。これらの源氏絵の多くが住吉派の絵であることも注目され、こうした人々の個別の活動とともに、その相互関連を探ることが今後の課題となる。

(5) 『源氏物語』と「源氏絵」は、王朝文化を継承する天皇家や公家にとっての存立

基盤であるとともに、平家から鎌倉幕府、さらに室町幕府から豊臣氏そして江戸幕府へと続く武家にとっての〈王権〉神話を支える宝器でもあった。後水尾天皇に代表される朝廷や公家の伝統としての権威でありつつ、「源氏」に連なる武家にとっても必要な、相互補完的な関係にあったといえる。徳川美術館には二代將軍秀忠が詞書を書いた『源氏物語画帖』もある。これは婚礼調度とみられ、婚礼調度もまたたんに女性の享受のためばかりでなく、公的な政治性を帯びていた。他方に、「白描小絵」のような女性が私的な享受のために描いた物語絵もある。

また、承応の前後に盛んに出版されるようになった『源氏物語』や『狭衣物語』また『伊勢物語』などの絵入り版本は、より大衆的な王朝物語の享受の媒介となり、その後の江戸文化へと通じている。そこには、絵が注釈などの解釈を反映している要素もみられる。個別の作品の分析とともに、こうした江戸文化の形成における文化コンテクストについての巨視的な展望を得たことも、本研究の成果である。

(6) 王朝物語の絵と和歌との関連という中心となる研究課題についての成果をまとめれば、『伊勢物語』のような歌物語が歌を核とした物語の絵であるのに対して、『源氏物語』や『狭衣物語』においては、歌を核とした物語絵とともに、散文的な場面とその解釈にまつわる絵もあるということである。『源氏物語』においては作中の贈答歌を含む場面が多いが、『狭衣物語』においては独詠歌や散文的な場面がより多くなっている。

『源氏物語』の絵と歌との関連については、その全体量が多いため、若菜上・下巻について、その「源氏絵」の場面選択について詳細に検討した。「源氏絵詞書伝称筆者一覧」で扱った8本に加えて、これまでに紹介されている源氏絵を含めて画像を入手できた20本ほどを追加したのである。「源氏絵」の場面選択の全体の傾向としては、和歌を伴う歌絵的な情景の多いことがこれまでも指摘されている。

若菜上・下巻においてもそうした場面はあるが、他の巻に比べれば散文による場面も多い。若菜上巻の源氏絵で最多の場面は、蹴鞠をする柏木が、猫が走り出た簾の間から女三宮をかいま見する場面である。若菜下巻では、柏木が女三宮の猫を手に入れて愛玩するユーモラスな場面、また六条院女楽の華麗な行事の場面、そして、光源氏が柏木の手紙を発見して女三宮との密通が露見する場面も多い。これらは、柏木が女三宮と密通するという劇的な主題に関わるものである。とはいえ、密通の場面そのものや、そこで柏木と女三宮が交わした「あけぐれ」をめぐる後朝の贈答

歌場面そのものの絵画化の例はみられない。そこに文字テキストとしての『源氏物語』本文とは異なった「源氏絵」の限界がある。

(7) こうした「源氏絵」の場面選択には、連歌の寄合語との関連がみられる。また山本春正の『絵入源氏物語』の絵には、松永貞徳に由来する注釈の知識の反映もある。こうした先行研究をふまえてその一端も検証した。他方で、「源氏絵」に描かれた六条院女楽の場面における琴(きん)・和琴・箏・琵琶という絃楽器の描き分けを検討したところ、琵琶や箏はほぼ正確であるが、七絃の琴(きん)については、それをかなり正しく描くものにおいても、琴(きん)には無い琴柱を描くなど、正確な知識が失われていることが判明した。そこにもまた、室町期から江戸前期にかけての享受者の文化コンテクストが反映している。

そうした、いわば有職故実からみれば否定的な要素ばかりでなく、女三宮を柏木がかいま見する場面などは、江戸中期以降に、歌舞伎や戯作などを媒介にして、浮世絵による見立て源氏絵のパロディ化を示している。これは王朝の物語絵が江戸文化の積極的な生成と結合した例の一端である。こうした文化創造の過程についての展望を得たことも、今後の課題に通じる成果であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 高橋亨、フランクフルト本『源氏狭衣歌合絵巻』について、国語と国文学、86巻5号、95～105、2009、査読有
- ② 高橋亨、『源氏物語』六条院の女楽をめぐって、アジア遊学、126号、128～139、2009、査読無・依頼論文
- ③ 高橋亨、近世初期「源氏絵」と詞書筆者について、中古文学、84号、40～59、2009、査読有
- ④ 高橋亨、間(インター)テキストとしての古注釈と『源氏物語』研究、平安文学の古注釈と受容、第1集、35～39、2008、査読無・依頼論文
- ⑤ 高橋亨、『狭衣物語』の絵画資料と歌、広がる奈良絵本・絵巻、三弥井書店刊論文集、49～76、2008、査読無・依頼論文

〔学会発表〕(計4件)

- ① 高橋亨、江戸時代前期の源氏絵と詞書筆者、CEEJA文化創造と知の発信としての図像解釈国際会議、2009年9月19

日、アルザス日本研究センター

- ② 高橋亨、近世初期「源氏絵」と詞書筆者について、中古文学会、2009年5月23日、国士舘大学
- ③ 高橋亨、江戸前期の物語絵とその詞書筆者たち、奈良絵本・絵巻国際会議ワシントン大会、2009年3月26日、フリア美術館
- ④ 高橋亨、物語の絵と歌、奈良絵本・絵巻国際会議、2007年8月26日、岩瀬文庫

〔図書〕(計1件)

- ① 高橋亨、名古屋大学出版会、源氏物語の詩学—かな物語の生成と心的遠近法、2007年、750ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 亨 (TAKAHASHI TORU)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10093048